

名前	テーマ	今回の気づき	意見・感想など
杉原環樹	スタディのアーカイブに関わるライターとして参加していますが、個人的にも清宮陵一さんの音楽を流したスピーカーの音の素晴らしい領域に心があります。新しい領域は新しい領域ゆえに、「言葉以前の感覚」のなかで揺らいているもの。このスタディを通して、そこからどんな音楽の姿が見えてくるのか、それをどのように言葉にすればいいのかを、同席させてもらいながら考えていきたいです。	エンジニアのzAkさんを迎えた今回のスタディは、ここまでの回のなかでもとくに印象に残るものになった。zAkさんのスタジオが小竹向原という郊外の閑静な住宅地にあること、村上隆作品やアート書籍が多くある休憩室の風景、独学で技術を学んだ駆け出し時代の話、フィッシュマンズの代表作が生まれた時期の「作業よりおしゃべりの時間の方が長かった」というエピソード、食生活と耳の拡張の話、エイフェックスツインの音楽を流したスピーカーの音の素晴らしい領域など、挙げていけばキリがないほど興味深い内容ばかりだった。なかでも自分としては、エンジニアという仕事に、自分のライターという仕事へのヒントがたくさんあると感じられたことが収穫だった。そもそもzAkさんがいまの仕事へ向かうきっかけになったのは、ある日、自分が惹かれる音楽と同じエンジニアの仕事であると気づいたことだったという。こうした、一般的に目立たないが、実は何かの表現の質に関わる役回りは、ライターにも共通するものだろう。zAkさんは、そんな裏方としての立場から出発し、自身を一人の表現者として世間に認めさせた。直接的な言及はなかったものの、そのプロセスには、zAkさんの仕事に対する周囲の理解や、zAkさんの仕事の、ほかのエンジニアとは決定的に異なる個性が関係しているように感じた。また、他者が演奏したりリミックスしたりした音楽を、zAkさんが何に着眼しながら加工していくのか、という話。これも、他者の言葉をまとめるライターの作業と共通する部分が多い。zAkさんはそのポイントを、「その人の音楽のなかで一番共振しているのはどこかをまず探り、その部分を中心にまとめる」と話す。そのさい、下手に全体的なバランスを整えようとはしないという。「いびつになることへの抵抗が自分にはない」と、zAkさん。そう考えると、インタビューなどをまとめるとき、自分にはまだ全体のバランスが崩れることへの恐怖心があるように感じる。ただ、ある素材の一番生き生きした部分を大胆に拡張させることで、そこに唯一無二の匂いのようなものが生まれるのかもかもしれない。これは、普段の仕事のなかでも意識していきたい発見だった。	食事やお香、スタジオの立地やインテリアなど、音とは直接的に関係がなさそうにも思える要素が音作りに与えているの、だろう影響を、現場でじかに感じられる素晴らしい機会だった。「音楽家のことは全部は助けない。(あるひとつのライブが)失敗してもいいと思ってる」や、「みんなが使う共通言語を覚えた方が効率がいいが、自分はある程度覚えられないようにしてきた」といったzAkさんの非効率性や失敗への態度は、アートプロジェクトへの重要なヒントのようにも思えた。全体として、人には真似できない面白い表現とはいかなる時間や経験から生まれるのかを、知識としてではなく肌感覚で感じられる回だった。
鈴木美恵	公共で聴こえてくる音	音とは何か——zAkさんのお話から光、香りも音だというお話がありました。光については12月18日の会で、皆さんとまち歩きをした際にまちの明かりからリズムを感じるという体験をして身体で感じる可能性の広さ、深さを多少認識することができました。香りは自分でも体が「揺らく」「ポジティブになる」要素だと考えますが「音」であるということであるとすれば、「音」とは「音楽とは」と言う概念が学術的に論じられていること以上の可能性を持つのではないかな—新たな「音」のアイデンティティを探る旅へと誘われました。zAkさんが限界集落でツアーを行い、予算の中でお香を優先的に買つての土地、地域をみんなで知るという取組みのお話は、文字通り響きました。PAさんというお仕事でPlace Arrangementの略ではないかと思ったほどです。そこで思い出したのが私の一番の音の衝撃はNYのグランドゼロでの水の音です。多くの方々で亡くなった場所の滝の流れるような音は、その瞬間の壮絶な光景を想像させるとともに、一方で日常の雑音をかき消し、静寂と共に鎮魂の想いが湧いて涙が溢れました。(人前で決して泣かない自分であっても自然の摂理に従うかのように)。水の匂いもその音に何かの和声を与えているのかもしれない。	参加できた回数は数えるほどでしたが、若干ではあります。普段お会いできない方がたのお話やパフォーマンスを拝見できたことは貴重な体験でした。社会の中で「音楽」がどう人びとに作用して、どうすれば何か役立つことができるのかを考えて行きたいと思い受講を申し込みました。自分の中では当初は公共の音楽として駅のサインである発車メロディー音に興味がありました(雑音化しているサインになっていない等)、それよりもっと小さな細胞の「音」の中に、また「音」の概念の深遠さまで思いを寄せることができました。お会いできたゲストの方ももっと多ければまた異なっていたかもしれませんが、テーマが変化したということは自分の中で化学変化が起きた、参加してよかったと思っています。ここに参加された方がたは、年齢も背景も異なりそれぞれの人生を持ち、体験の中で興味を持たれている事、大切にされていることは様々だと思います。当初からどう変化したのか、という初発の感想から現時点での(途中、現在進行形、発展途上であっても)感想はそれぞれだと思いますので、伺ってみたいと思いました。
蠟川小百合	自分の持つ地図を描き替えるながら、音楽の海を旅する	レコーディングエンジニアやPAに対するイメージが変わった。勝手なイメージを持っていたということも気づいた。自分の今の仕事の身近なところで言うとインストレーター、テクニカルスタッフのようだと思った。アーティストが作品を世に出すときに、必要不可欠な技術を提供できる存在。相談に乗ることもするし、時には助言や提案もする。音楽のスタジオやレコーディングなど、日本に入ってきて実はそんなに時間が経っていないのだということもわかった。何もないところから道を切り拓いてきたzAkさんは、その意志の強さを感じられる一方で、何か明確で決められているものを目指すのではなく(むしろそういうのは嫌と言っていた)、未だ見ぬ世界を自らつづけているから、アーティストなど周りの人たちからおもしろがられ共感されるのだろう。最初は何かを真似したり目指したり、そこから始まるけれど、超えていくことが大事だと感じていたのも印象的だった。いつの時代にもおもしろい人はいる、と言うのは確かにそうで心強いことでもある。それにいかに反応できるかが大切で、そこから追いかけてたり目指したりし始めることがあるだろうし、自分ももちろん、多くの人がそうなるのといいなと思った。	初回のスタディで音楽の歴史を眺め、第2回では自分と音楽との関わり地図を描きました。その後は、知らなかった世界へ次々と案内してもらいました。大航海の旅のようでした。自分だけではなかなか遠くに行くことができませんでしたが、ナビゲーターのおかげで行くことができ、本当に貴重な機会になりました。これまでは、音楽の在り方の現状に疑問を持つとともに、批判的な考えや意識が自分の中にありました。情けないことですが、私の場合は偏見や差別にも近かったのではないかなという気がします。旅をしてみて、今は自分の音楽の地図への書き込みも確実に増えるだろうし、これからは益々広がっていく予感がします。実際、足を踏み入れたばかりの新潟の土地でも、まずは自分の音楽の地図で旅してみたいと思います。ありがとうございました。
宮内俊樹 (名小路浩志郎)	公共における音と音楽を、僕たちはどうしたら「自由」にすることができるのだろうか?	今回はあこがれのzAkさんということで、とても静謐な場所でスピリチュアルな音とはなにか、ということを考えさせられた。そもそも音に「スピリチュアル」という感情を感じるのには不思議なことだ。だがそう表現するしかない感覚がzAkの手がけた音楽にはある。それは彼の「音楽は魔法なんですよ」という表現がいちばんしっくり来る。「イビツな音は残す。現場の音、それは活かす。その場で出会うべきハブニングみたいなもの」経験値もあるけど、自分は一般的なエンジニアとは違う。コードがなくても演奏できるのと同じ。すごく特殊だし、みんなが知っていることは知らなくていいと言われてエンジニアとして育った。僕が90年代にフィッシュマンズの音楽を聴いたときは、まったくその感覚で、シーンにおいても、音作りにおいても彼らはまったく異質だった。今回彼のスタジオを訪れて、その秘密がよく分かった。ホワイトセージの香り、ビンテージ楽器に囲まれた空間、村上隆の作品やアート書籍が置かれた部屋は、リラックス・ルームというか「瞑想部屋」のような趣、そのすべてにzAkさんの深い精神性を感じさせた。zAkさんは武満徹の『ノヴェンバー・ステップス』にまだ影響を受けているという。本質や違いを理解した上で「無理に合わせない、自然に共存する」、それはまさにzAkさんの生き方やサウンド、スタジオ空間に現れている。そして現場の音とは、公共における音のあり方につながる話だが、その瞬間に流れる音、空気、音と音の共振、それらすべてをあるがままに受け入れるアティテュードであり、アーティストと聴衆といった境界線のない「公界」のように思える。	
山下直弥	新しい音楽の伝え方、巻き込み方	zAkさんが行ってきた仕事は職人であり、クリエイターだと感じました。私は主にクラシック音楽分野におけるアートマネジメントの現場にいますが、クラシック音楽の分野におけるアートマネジメントとは主にアーティストをただただサポートするだけという意識が強いように感じ、クリエイティブな場に出ていかない節があります。それはある種、職人的で、自分の仕事と相手の仕事の間に線引きをし、プロジェクト内で自分の領域だけの仕事をやっているようなイメージです。今回、「音響技術」という機械的な仕事とみなされていたものに対して、zAkさん自身が持っているクリエイティブな考えを持って接し、「音響技術」という仕事で新しい音楽を生み出すクリエイターの一人となっていくプロセスを知りました。私が行っているアートマネジメントという仕事も線引きをするのではなく、どうやったら新しい音楽が生まれる場を作ることができるのか、そのプロジェクトに自分がどのようなクリエイティブリティを持って接するべきなのか、新しい音楽を生み出していくためにも、アートマネジメントという役割の意義を示していくためにも、これから必要になるのだと感じました。	あの空間で聞いたAphex Twinの『Blue Calx』が未だに忘れられません。